

端とする1主枝を考え、その主枝の中に黄色鞭毛藻、珪藻、褐色鞭毛藻、渦鞭毛藻が入るとして、この意見が本文中の随所に見られる。

第2部は藻類の形態で、藻類の分類の規準 (Criteria) としての形質を述べている。

第1章は生殖で、生殖細胞の外形、繊毛 (鞭毛) の有無、それらの長さ、数、附着点、眼点、収縮胞について述べている。しかし SCHUSSNIG のように電子顕微鏡による解明がないのは残念であるが、わが国の事情では十分文献資料を集め得なかつたからであろう。

第2章の藻類の性では、受精物質 (Gamon) について MOEWUS と KUHN の化学的研究を述べ性決定物質 (Termon) におよんでいる。

第3章は生活史、核相交代、世代交代についての著者の年来の構想を公けにしている。すなわち、単相世代を G または g で示し、複相世代を S または s であらわし、両世代を比較する時に、外形の大なるものを大文字で、小なるものを小文字で示している。しかしツユノイト (*Derbesia*) の生活史は G. S. (GA $\times$ SA) 型と示し、その表現に苦心と細かい配慮の跡がうかがえる。また寄生の場合は  $\mathfrak{S}$  とか  $\mathfrak{G}$  とかの記号を用いている。

第4章は遊走子、孢子、接合子の初期発生の形態的特性を挙げ、分類の規準として重視すべき諸点を述べている。

第5章は栄養体の細胞構造を述べ、単細胞と多細胞、1核性と多核性、細胞分裂の3型、染色体、葉緑素などの色素体について述べている。

第3部は藻の種類で、分類学者としての著者はその細部にわたって述べたいところであろうが、紙数の都合で相当おさえている。すなわち綱という植物群単位で、その特徴を明快に述べ、各綱間の差異、更に各目間の差異も明らかにしている。

藍藻綱は GEITLER の分類によつており、紅藻綱では目の分類規準である造果器のでき方を述べ、更に発生形式の重要性を説いている。珪藻綱では、殻の構造と分類を結びつけ模式図でこれを示している。褐藻綱では遊走子囊の種類と遊走子形成をわかり易く述べ、緑藻綱では、体制の比較を略図で示し、世代交代も要領よく説明している。

術語索引は和→英、英→和と双方から引けるので、辞典的利用価値がある。

(猪野俊平—岡山大学理学部生物学教室)

テイラー 著

### 南北アメリカ東海岸熱帯及び亜熱帯の海藻

W. R. TAYLOR: Marine algae of the eastern tropical and subtropical coasts of the Americas (The University of Michigan Press, Ann Arbor, 1960, pp. I-IX, 1-870, 内 94 枚の図版又は写真版を含む)

著者はその壮年の砌即ち 1924 年から 1926 年に至る年間、毎年夏期 Carnegie Institution of Washington の Dry Tortugas の臨海実験所に滞在して附近に産する多数

の熱帯性海藻の研究に従事しその結果として *The marine algae of Florida, with special reference to the Dry Tortugas* の大著を初めとして其他多数の論文を公にしたが其後もカリブ海、ベルムダ、コスタリカ、更にビキニ、ガラパゴス等大西洋並びに太平洋熱帯及び亜熱帯地方の海藻に就て永年研究を続けているが、本書はその内南北両アメリカ大陸の東海岸に於ける熱帯及び亜熱帯圏内に産する海藻の総括的記載である。即ち北は合衆国ノースカロライナ州から南はブラジルの沿岸に至る間に産する760種、140変種等に就て一々委しい記載文を与へ94に及ぶ図版の精巧な解剖図及び外形図又は写真によつて記文を補っている。此所に記載されている海藻は緑藻、黄緑色鞭毛藻、褐色鞭毛藻、黄色鞭毛藻、褐藻、紅藻の6群であるが此等の特徴は勿論のこと更に小さな群即ち科、属等に就ても委しく特徴を述べ、又夫々の科、属、種に就てはわかり易い検索表を掲げて相互間の区別を明かにしている。又各種の記文の後には夫々重要な文献を記し、更に各種毎に委しい分布を述べているがそれは単に今迄の文献に現われたものばかりでなく、ニューヨーク植物園やハーバード大学の腊葉館、其他の標本によつて明かとなつた新産地を多数加えている。これ等の記文の後には本書に於て新たに新群としたものの羅典文の記載文を与えているがそれは新種とされたもの8(内2種は Dr. THIVY によるもの)、新変種4、新併合等14種であるが、更に *Wurdemanniaceae* なる新科が設けられている。勿論これは *Wurdemannia miniata* (DRAPARNAUD) FELDMANN et HAMEL をタイプとしたもので、テングサ科と共にテングサ目に入れられている。本種は嚢果を欠くが栄養体の構造は、テングサ科に入れられるテングサモドキ属 (*Gelidiopsis*) に近いが本科の四分胞子は目の字状に分割するので、テングサ科のもの三角錐状に割れるものと異なる。

以上の外著者は此等地方に於ける海藻研究の歴史を述べた後特にフロリダ、ベルムダ地方に於ては海藻の詳細な生態的観察を行ない、種々の著しい特徴ある景観を見事な写真版をも用いて記述しており砂地、泥地、岩地等の外マングローブの根上に形成されるコケモドキ、アヤギヌ等の群落につき又有名な Sargasso Sea を作る浮游性のホンダハラの二種に就ても報告している。更に垂直分布に就ても一言ふれる所があり、それによれば30mの深所に於て見出される約130種の内訳は緑藻56、褐藻15、紅藻60であり、50mの深所ではそこに生育する60種の内34種が緑藻、10種が褐藻、16種が紅藻である。更に70mに下れば全数31の種類の内緑藻は21種、褐藻は1—2種、紅藻は9種である。又90mの海底では生育する海藻23種の内訳は緑藻12種、褐藻1—2種、紅藻9種である。即ち少くともフロリダ、ベルムダ、カリブ海等に於ては緑藻は紅藻と同程度の深所の生活に適応し得るものであると云ふ。(尙これに類似の事実は我が沿岸に於ても嘗て殖田、岡田両博士によつて我が沿岸からも報ぜられている) 尙かかる深所の海底は非常に軟かく且つ低温であり、緑藻は殆ど全部ミル目(Siphonales)に属するもので、しかもそれ等の体は皆通常の緑色を保っているという。又紅藻類のかかる深所に産する種は緑藻程その所属は一定していないが然しイギス目(Ceramiales)に属する種が多いという。以上の外海岸に於ける海

藻採集の諸注意, 又此等を保存する方法, 薬品等に就いても行届いた記載, 注意等が述べられている。従つて本書は特に熱帯及び亜熱帯の地方の海藻に関心をもつ者にとつては不可欠の参考書であることは言を俟たないが, 又一般藻類に興味を有する者にとつても頗る有能な指導書ということが出来る。価格は米価 19.50 ドルである。

(山田幸男—北海道大学理学部植物学教室)

## 学 会 録 事

### 会 員 移 動

(昭和 35 年 8 月 16 日より 12 月 15 日まで)

### 新 入 会 (16 名)

### 住 所 変 更 (8 名)